被虐の街

会員は、指折りの変態揃い
買われた人妻
杏奈は……

荒縄工房
あんぷらぐど

SM小説

被虐の街

あんぷらぐど著

荒縄工房・発行

本作品はすべてフィクションであり、実在する人物・地名・団体とは一切関係ありません。また、特定の個人、団体、宗教、人種、性別などを誹謗中傷する意図はありません。

あんぷらぐど

ＳＭ雑誌に「仲ゆうじ」名でＳＭ小説を執筆して作家活動をスタート。その後、編集の仕事に携わる。九〇年代よりネットで複数のペンネームで小説を執筆。二〇一一年「荒縄工房」より独自の自虐的ＳＭ、一人称による告白形式の作品、伝奇ＳＭ小説などを発表し続けている。東京在住。

目次

二次元コード　７
最初の落札者　２７
肛虐縛り　４７
言葉で嬲られて　５７
恥部いじり　６８
すべての穴を支配されて　８７
拡張責め　１０４
野外調教　１２２
淫らなランチ　１４２
露出散歩　１６０
産卵遊戯　１７９

洗濯バサミの悦楽　１９６
懲罰　２１４
変態労働　２３２
残酷な夜　２５１
ハメられて　２７２
旅行に連れ出される　３３２
宿で見世物に　３５３
お座敷ＳＭショー　３７４
露天風呂　３９２
踏みつけられて　４１６
火炙り刑　４３４
残酷嬲り　４５７

果てしない悦虐　４７８
終章　４９０
奥付　５０８

二次元コード

外は三十度を超す猛暑というのに、氷のように冷たい女がいるのは、ありふれた駅前のカフェ。ガラス張りの喫煙室で彼女はタバコをふかしながら、私の運命を決める書類を無造作に濡れたテーブルに置いた。

彼女はアイスモカを飲んでいて、そのグラスから流れ出た滴がテーブルに大きく染みだしている。書類の端がそこに触れて、色が変わってきた。

でも、私は手が出ない。

「美濃杏奈（あんな）さん。わかってらっしゃるわよね」

その女は私よりも五つほど年下と聞いている。まだ

二十代半ば。美しいのに表情のないその顔は、人形のようで、不気味だ。
私はその書類を見せられて、ガタガタと震えていた。
「事情がどうであろうと、そこにサインをしていただければ、あなたの借金はすべて消えますわ。ただ、このチャンスが使えるのは一回だけ」
「一回だけ……」
「そう。一つの借用書につき、この返済方法が使えるのは一度だけ。だから、借金全額をこれで返済するなら、それ相応の覚悟がいるわね」
体を売る、という言葉が頭の中を渦巻いている。それも、この契約書によれば、文字通り、相手の所有物

と同じ状態になってしまう。よくある売春ではない。
「どうするのかな」と強く言い放っておきながら、少し柔らかな口調になる。「今年三十二歳？　結婚四年？　旦那さんはネットでよく『ブラック企業』と言われているあの会社の課長さんでしたっけ？　今夜もお帰りは深夜なんでしょう？　子どももいない杏奈さんには時間はタップリあるし。これだけの借金を返せるんだから、すばらしいと思わない？」
「正直、迷っています」
「そうね。迷うわね。だけど、いま迷うなら、私にお金の相談をしてきたときに迷うべきだったんじゃない？」

「でも、ここまで大変なことになるなんて……」
「そういうものよ」
春川華純は新しいタバコに火をつけて、私が苦手だと知っているのに、顔に煙を吹きつけてきた。
「いろいろと計画が狂ったわけでしょ？　よくあること。あてにしていた旦那さんのボーナスが出なくなった……」
「昨年に比べて三割カットなんです。しかも支払いは二カ月後に半分、三カ月に残りというんです……」
「あー、それじゃ、うちのシステムだとその間に金利が二倍になっちゃうわね。いまはまだ二百八十万円だけど、今後の金利が二倍になれば、三カ月後には五百

万ぐらいになっちゃうんじゃない？」
「五百万！」
絶望的だ。とても、返済できないだろう。
もはや、これまでだ。
私はスカートの上でハンカチを握りしめる。汗が止まらないが、そんなことを気にしてはいられない。人生がかかっている。
「うちは、非合法でお金の用立てをしているのよ。知っていたわよね？　それでいて怖いお兄様方とは無縁。取り立てもしない。無担保、無保証人。秘密は厳守。そして女性にしか貸さない。すべてこの春川華純が自分ひとりで仕切っているの。杏奈さんは誠意のあるま

じめな人だと見込んだから、貸したわけ。でも、それが戻らないと困っちゃうのよね。私だけじゃなくて、借りたいって待ってる人に貸せなくなっちゃうから……」

「すみません」

「あなたも、誰かがちゃんと返済してくれたから、あのお金が借りられたわけなのよ。そのとき、あなたは助かったんじゃない？　役に立ったんでしょう？」

もちろん、あのときの百万がなければ、いまはない。事態が明るみに出ていれば離婚していたかもしれない。

「それとも、私を訴えます？」

春川華純の目が怖い……。なにもかも見通している

ようだ。
「かわいらしいお名前よね、杏奈さん」
ニッコリと彼女が笑うとゾッとする。強すぎる冷房で体は冷たくなっていくのに、汗が止まらない。
「杏奈さんが訴えれば、そうねえ、私は悪い人ということになって、当然、これまでの金利で借金は相殺でしょうし、あなたにいくらかお金を返さなくてはいけないかもしれないわね」
すでに返済額は最初に借りた百万円は超えているが、延滞金利が重くのしかかっている。
そのとき、華純の隣に、妖艶な四十代ぐらいの女性が座った。濃いフローラル系の香水をつけている。す

ると、華純は、その女性に自分がくわえていたタバコを差し向けた。赤い口紅がフィルターについている。やってきた女性は微笑みながら、口を開きそのタバコをくわえた。

「ねえ、そうでしょう？　真知子さん。訴えるかもしれないの、杏奈さん」

「あら、それは困るわ」

声はガラガラだ。真知子と呼ばれた女性も、私の顔に煙を吹きかける。

「あなたはおきれいだから、すぐ返せると思うし、そうした方がこの街に住み続けるなら、安全だわよ」

駅前にはスーパー、学習塾、ファーストフード、こ

のカフェがある。わずかに十店舗ほど残っている商店街をすぎると、あとは住宅、マンション、団地だ。コンビニとクリーニング、私塾があるほかは、住居ばかり。

退屈なベッドタウンに住み続けなければならない理由はない。だが、引っ越し費用はない。事を荒立てて、夫に知られるのも嫌だ。

「訴えたら、あなたのことや顔が知られるだけじゃないのよ」と真知子が言う。「華純さんのファンも、そこそこいるのね。それを敵に回すと面倒なことになるかもしれないわね。もちろん、味方になれば、すごく心強い存在だけどね」

水を飲もうとグラスを手にした。氷が溶け、ぐっしより濡れていた。いっきに飲み干した。ハンカチで手を拭う。

「訴えたりはしませんから……」

やっとそう言えた。

「じゃ、真知子さん、説明してあげて」

突然、興味をなくなしたように、華純はスマホをいじりはじめた。

真知子が低い声で言う。

「オークションってところね。クラウドファンディングと言ってもいいし。お金を出してもいいという方が、匿名でネットで参加するのです。市場のセリのような

ものと思ってくれてもいいわ。あなたならすぐに出資者があらわれて、問題は解決すると思うわ。その人の希望する時間にスタートします。それまでに半金が払われます。残りは時間が終わったとき……」

「い、生きて帰れるのでしょうか……」

その言葉が耳に入ったらしく、ケラケラと春川華純は笑った。大きな口。真っ赤な口紅。真っ白な肌。整形したかのような美女。そしてこの街の闇を取り仕切る。

「誤解なさらないで。私、奥様を応援してきたつもりなんですのよ。だいたい、最初のとき、そう申し上げたはずですけど」

以前に一度、いまから思えば大した金額ではない借金をしたことがあった。それは計画通りに返済した。「奥様、いつでも相談にいらしてね。私、奥様の味方ですから」と言われたが、二度と世話にはならないつもりだった。底知れぬ怖さを感じたからだ。

夫の収入が少なく不安定だというのは表向きの理由。実際は私がやりたいからはじめたネットで手軽に稼げるサイドビジネス。安く仕入れて高く売る。ネットオークションで稼ぐ商売。

最初はよかったが、徐々に利益が薄くなり、焦ったのか、自分の力を過信したのか、いい仕入れ先と思われるところで大量の発注をしてしまった。人気商品だ

から時間がかかっても、売り切る自信はあった。ところがネット上で価格が突然、半分に下がってしまった。泣く泣く、半額で売ることになった。もちろん売れて大忙しになったが、在庫をさばく間にさらに価格が下がっていき、気付いたら百数十万円のマイナスになってしまったのだ。

これまでの儲けもあったので、八十万円ほどを借りることができれば足りた。キリのいい金額でしか貸せないと言われ、百万円を借りた。すぐに二十万円を返済したのだが、そのあとの返済がうまくいかなくなった……。金利さえも払えない月があり、それを元本に組み入れ……。翌月の返済額はさらに高くなり、返済

が難しくなっていく。その繰り返しだった。
「たとえば、あなたの隣にマンションがありますわね。あそこにお住まいの二十代のＯＬさんは、先月、これで返済なさったのよ。たった十二時間で六百万円ですって。時給五十万円。すごいわよねー」
契約書は小さな文字でびっしり書かれており、要するになにがあっても自己責任であることを承諾しなければならない。それだけではなく、心身にどのようなダメージを受けても秘密を守り通すことを求めている。非常識な契約だ。
「もちろん、いまもフツーに生活されてらっしゃるわ」と真知子は言う。「それから、これも了承してほし

いの」
契約書の何ページ目かを真知子が開いた。
「この方法を採った以上、あなたをこちらで管理することになる。だから体に印をつけさせてもらうんだけど……」
「印、ですか」
「二次元コードよ。どこか、目に付かないところに、これぐらいの大きさだし」
ＯＫサインをする。指でつくった輪の大きさだとすると、かなり大きい。
「ＯＬさんは、脇の下にしたわね。そんなところまじまじと見る人はいないし、モデルでもないし。毛が生

えればごまかせるしね」と下品な笑い声。
「ちなみに、私はここよ」
真知子は肉づきのいい足を伸ばし、スカートをまくりあげ、左足の太ももを露わにした。陰毛が見える。下着をつけていないのだ。その秘部のすぐ横に三センチ角ほどの複雑な模様を描いた二次元コードがあった。
「杏奈さんは永久脱毛？　もし脇毛を脱毛しているなら、下の毛のところもお勧めだわ」
周囲に客がいるカフェで、大きな声で話す。
汗が止まらない。強烈なエアコンが効いているのに、脇の下も、腹部も、汗でびっちょりとなって、下着が張り付いている。

「これは、出資した人を守るためでもあるわけ。そこで起きたことは死ぬまで他人に話さないこと。その誓いを守ってもらうためにも、申し訳ないけど少しだけ肌を汚していただくのね」

「あのう、どれぐらいの時間、拘束されるのでしょう？」

「この方法はオール・オア・ナッシング。あなたの希望する金額全額に見合ったお客様が現れたときだけ、成立する。もしかすると複数のお客様になるかもしれないわ。そしてそれぞれの金額に見合った時間、杏奈さんは相手に従うことになるわね。すべては市場価値。ＯＬさんが十二時間で六百万円になったのは、彼女を

気に入った客がいて、それだけ出してもいいと思ったから。そして彼女も、客が求めることをすべて受け入れることを約束したからよ」

ごくりと私はツバを飲んだ。時給五十万円に見合うような、どんなことを許したというのだろう……。その十二時間になにがあったのか。知りたい。だが、教えてはくれない。まだ、私は契約書にサインをしていないから。いや、サインをしたとしても、教えてはくれないかもしれない。

「わかりました」

思った以上に平静な声が出た。

「はい、じゃ、ここね」

サインする場所を示された。そこに、渡されたペンで美濃杏奈と書いた。
「印をつける費用、参加費用は成立時にそこから引かれますからね。大した金額じゃないから安心してね」と真知子が念を押す。
もうあとには引けない。
「じゃ、隣のビルで印をつけましょうね」
やっとスマホから顔を上げた華純は、契約書をカバンにしまうと、立ち上がり、「それじゃ、よろしく」と言って、先に店を出た。私たちもあとに続く。タクシーを止めている華純。その横を、隣のビルへと入る。
「どこに印をつけるか、早く決めなさいよ」と真知子

の口調はきつい。

最初の落札者

「ここの会員は、指折りの変態揃いだからね」

真知子の言葉が耳に残っている。

夫を送り出し、洗濯と掃除をするいつもの朝。今日も日中は三十度を超えるという予報だ。マンションの十階。子どもがいないので、三ＬＤＫでも広すぎる。窓の外は、街が広がっている。同じようなマンション、団地、庭付きの一戸建て。神社の森。公園。暑過ぎる上に学校は夏休みとあって、朝というのに人影は少ない。

私は売れた。恐ろしい懲罰の場に引き出されたわけ

ではない。真知子の家で言われた通りにした。それだけで、一時間ほどの間に出資者が現れた。「おめでとう」と春川華純から電話をもらった。

虚しさが夏空に広がっていく。

とうとう、こんな自分になってしまった……。夫にも、父や母にも友人にも、そしてご近所の人たちにも、後ろ指を指される行為。体を売って借金を返済する。大昔からあるこの方法が、二一世紀のいまも通用していることの方が不思議だった。

ただ、真知子に言い含められたように「ここに参加している人たちは、ただ人妻を抱きたいだけでお金を出しているわけじゃない」のだ。

「変態さんほど時給も高くなっていくの。今回は、すばらしいお客様が揃ったみたいね。あなたの容姿が気に入られたのかもしれないわね」

どことといって特徴のない主婦。夫は結婚するときまでは褒めてくれたが、容姿について他人から言われた記憶はあまりない。

三百万出すと言った人は、向こう三カ月の期間を要求してきたので真知子が不成立にした。その後、一日十万の人たちが何人か現れ、そこからセリが本格化し、最終的には、一日四十万の二人、三日百二十五万の人が二人。合計四人が参加してファンドを組み、返済計画が成立した。

「よかったじゃない。全部でたったの八日で返済。五十万円お釣りが残るけど、印をつける費用十万円、セリの費用は成立金額の一割だから、三十三万円を引かせてもらうわね」

のこり七万円。これが現実なのだ。時給五十万の二十代ＯＬとは大違いだ。本当にそんな女性がいたのだろうか？

チャイムが鳴った。ドアホンを見ると、そこには人の顔ではなく、スマホの画面があった。私の顔写真。それは真知子の家で撮られたものだ。今日、明日は一日単位で私を買った人が来ることになっていた。

オートロックを解除するボタンを黙って押した。脇

の下に入れられた二次元コードがピリッと反応した。あまり痛くはないと言われたが、いつまでも痛かった。

男がやってくる。変態だという。

「杏奈さんは、平日、ご主人を送り出してから夜中に帰宅するまで、十二時間を一日として売り渡すので、なにがあってもその時間は確保してね。ダメになった時間は倍にしてあとで追加になるから気をつけてよ」

真知子が勝手にセリの条件として決めていた。これをすべて条件通りに履行しなければ、セリ落とした人たちは残金を振り込まない。私は体を汚し、ぬぐい去ることのできない記憶と、一生つきまとう心の傷を負った上に借金も残ってしまう。

「そうなったら地獄よ」と真知子はさらっと言う。
私は玄関へ行き、スコープを覗いて待った。みなさんは人妻だとわかっているのだから、妙なことは考えないで、普段通りにしていなさいと真知子に言われていた。そして「言われたとおりにすること。素直に反応すること」をアドバイスされた。
「初物を狙っているわけだから、鮮度が大切なのよね」と言う。「それに、あなたはどうせ一回キリなんだから、妙に気を回すことはないのよ」
人影がスコープに入った。男だ。まぎれもなく。ストライプのワイシャツを着て七・三に髪をわけている。旅行バッグを持っていた。

奥付

お読みいただき、ありがとうございました。

二〇一七年一月刊行　第一版

著作権　あんぷらぐど（荒縄工房）

荒縄工房の情報は下記サイトへ

●ブログ「荒縄工房」

●ホームページ

●荒縄工房　ＳＭ研究室

●今日も上機嫌ってわけないだろ

コメント、メッセージ歓迎。ご意見、ご感想、ご提案など随時、ブログで受付中。